



そらあし

本間文庫  
文庫 14  
A 146







漂泊の記

廿年十一月廿百と云ふ。物ふる男見一歳多るを伴ふ  
 ひとををみん。日首を大儀ある岩崎氏別邸に好着自らぬ  
 家へ。時解し出さる。聞き、一浴して休憩あり。あはれ  
 小者氏歸り来りぬ。他人との雑居、居とあはれいこ  
 窮乏を感じし。

廿九年午前十時頃大坂氏順は、と其の近傍に身を操す。  
 歸り来れば、あまのしのる高より来られぬ。是時宇勢  
 発順を待たむ。其のあとに田原なる鴻盟館に来りぬ。  
 海洋前より用せられた島は雲のぬく煙のぬく。其の伊  
 豆相撞の山の立すまひ。頗る佳景あり。海濱に  
 降す立ち、はく小破辺に流ぐ。流あり。童は去りて。履を  
 濕と。衣服の裾の濡るを厭はれ。彼方子飛び此方へ越へて

おん



流を登る水かさし出る枯れ草の元小のうらまの井の枝あり  
文章は能き物得くくと、之を突きやりし流のまのせれば或る  
時は敵の軍あり或時は蔭原の支へりるれど或は石を投ぶ或は  
取り上げもあつ、流を下すふとのくちを海辺にお出でぬ、流は女あ  
く、いづく連ければ、杭はあふる、是のせまる白浪の中は没  
す、波は勢を沖遠く送るもせむ、彼方此方、揺りつ、雨は碓  
小打度了ぬ、手おぬり上げし、又波は投ぐれば、まかり来るそれ  
のれき白浪は棄りて、又えの碓は歸り来りぬ、まよと、真まき  
人の流れの末も心おされて、あなれ、涙のまはりよと、なと面を見  
たりかせし、流れは花の一枚を流ししと云ふ、良縁の事  
を懐ひおぬ、昔は、雨なまをいえの碓は歸れば、ふはま  
ふと、接てのくまき、下通とやらむこのと、何とやらむ、心  
も静、まらふ、取りなげむと云ふ、文章を押し止めて、宿

近く歸りて、首方近く、雨霧あひる、海面を漕ぎ出る船の行衛  
を眺めふと、ふと、雨小降りぬ、夜は、其の浮世の夜を清く、悲  
のね、慰むをさすむ、ふと、福と呼ぶ、女あり、海まぶしく、まの  
れを、花の雨影あり、まよと、我も云ふ、或人のぬめ、心を、流  
ふと、聞する、今は、いふまゝ、たきぬるや、と、いふ、聞しく  
なると、人の、まよと、面おも、うむと、いふ、かれば、おは、思の、女、  
面おも、ま、顔、を、笑、う、ま、う、ぬ、女、か、彼、人、の、上、を、聞、は、今、も、猶  
い、あ、あ、な、り、と、云、ふ、出、で、十、田、原、の、市、街、を、散、歩、し、歸、り、ぬ、  
就、前、前、窓、を、推、せば、周、中、火、点、り、たり、い、な、と、え、と、ぬ、る、日  
あ、し、と、い、ぬ、

三十日、朝は、早、の、ら、ふ、起、き、出、で、ぬ、朝、の、れ、ぬ、た、そ、く、宿、の、ま  
の、自、心、と、共、小、碓、辺、小、を、ぬ、昨、日、の、牛、の、ま、と、石、傍、を、寄、む  
れ、ど、あ、ら、ふ、夜、の、間、の、波、を、洗、れ、れ、む、け、む、今、は、く、何、の







の業を極めし雨申を止むとして佳驪をて 某の春を連水の朝  
屋の訪ふ相其後亦、巫蹟を行く、天代子は嬌羞甚しし来り  
ず、夜ふたり、すのれの花の君小座きたる、夜と云ふて女は太平  
のの換物職人あぶし、嫁せし由を考る、昔、昨日の片羽の志を  
は、其の識よりけること思ふも、敢果あしし、顔そくは、片羽のをあし  
と題して、なまを親まむのと云ふ、酒を嘗みたる大い読す、年  
賀の状を出す、言と云ふ少女と強る。

昨日は國會解散を見くると聞く。

明治廿七年一月一日

おき出て志は、時、唐鮎を詠み、雅集を言ふ、雪を御免  
共、山牧をさる、時、来る、六の光を袖に受け、溪流の流  
たきを下観し、帝子歸れば、深淵、厚か、強る、天代女の如く

言ふ、おき、其の言は、早く、歸り、偏り、主婦、小例の牛を  
凌じ、志、時、浪、境の澤を登し、下、感、胸、を、鼓、し、心、氣  
沈み行き、心裡の温流正しく、酒をさる、心地、自失  
悄然とて、徒歩、國府、津、河、上、途、上、新、年、の、光、景、因  
る、茅、屋、も、春、の、け、ち、は、見、も、道、の、風、吹、の、力  
塵、ま、み、れ、て、我、と、我、姿、を、憐、れ、み、酒、匂、の、揚、上、の、ま、さ、る、を  
若、者、ち、る、水、を、眺、め、仰、け、を、あ、ら、ま、り、静、小、我、の、歌  
を、考、み、て、ひ、そ、う、の、習、息、を、も、ら、ず、あ、は、れ、お、あ、は、れ、て、大、座  
を、歸、り、ま、日、午、後、五、時、也、  
け、雜、徒、を、ふ、い、ぬ

二日、其の日は、人々と、其の鏡を看み、し、花水の、織り、露の  
枝、の、初、ま、る、百、言、を、打、つ、言、ふ、林、阿、の、小、鳥、を、追、え、得  
ず、空、を、か、飛、雁、の、向、を、究、め、し、細、く、二、雀、を、舞、け、し、る。











脚の白雪、皚々たり、村を流るるを過ぐる五六、松林を控  
る二三、猶く藤澤の駅あり、着きぬ、途上の松林かて、  
箱根見へおきければ、王くちげ箱根の山は木がくれて、表  
をい思ふと叫ぶ、直ちか、藤澤の里と、いふ人あり、  
此にて、僅かの食を用へ、又江の島に向ふ、緑のれて常盤の  
色もさびくれば、素山の次女も、晴のふらねど、まの景色は  
さえずと思ふ事、殊々今日は、空も清く、曇るく、木は、赤かやらむ  
沈み、その景色、浪の音も、いづくも、夏な、棋へぬ如く、聞へて  
衣も、濡き、さばり、なる君は、いづくも、沈み、赤か、沈み、赤か、  
まの、この、彼の、山々の見ゆる、恨み、あるらむ、鎌倉、さる  
長、この、の、大、佛、を見る、大、知、氏、の、庵、を、叩く、主人、の、天、は、高  
み、出、で、抜、い、心、として、留、す、所、の、人、の、み、あり、き、晩、食、の、後、  
静、して、春、と、大、恥、社、を、別、ち、大、磯、を、歸、る、

五月朝、時、頃、起き、出、心、一、番、の、列車、まで、返、子、か、わ、し、  
僧、史、二、人、大、四、匹、を、伴、ふ、り、山、を、の、け、め、ぐる、兔、は、犬、の、み、見  
出、し、て、我、一、行、の、眼、み、入、り、ず、山、鳥、は、三、四、ッ、出、た、れ、ど、打、外、志  
ぬ、と、の、し、する、内、雪、降、り、出、ければ、午、食、せ、む、と、元、車、高、か、た、戻  
り、来、ぬ、食、事、中、降、雪、柳、茶、茶、の、ぬ、く、粉、々、たり、さて、は  
と、を、歸、る、葉、か、就、き、ぬ、六、花、風、舞、を、て、袂、止、ま、り、祝、の  
こ、も、る、もの、も、た、し、駒、止、め、と、永、せ、し、の、昔、も、思、れ、ぬ  
午後、六、時、頃、歸、宅、豊、川、氏、車、部、が、来、り、て、佐、佐、木、ぬ  
六、日、午、前、は、二、河、作、も、お、し、午後、一、時、祭、を、て、人、々、は、都、路  
か、向、か、我、は、と、り、鴨、重、長、の、いと、い、乱、る、心、地、す、れば、春、お、止、ま、り  
て、国、府、津、を、来、り、馬、車、を、投、が、塔、の、澤、を、来、る、流、荒、最  
早、去、り、て、夕、の、う、さ、り、夜、か、か、り、て、流、を、と、る、女、と、流、を、い、と、い、志  
ほ、れ、る、と、は、な、れ、ば、病、あ、こ、も、あ、る、や、と、問、ふ、か、た、り、し、田、月、も、悪























お交りして晩までハイランドの物語りす

十四日朝も晩も起きぬ正午頃出て、蓮玉子  
著の妻を御大志、元川氏を拜せし家へ歸る。重信氏  
の、三ノを、雅彦す、松子、元川氏と、決る。明  
日は一番町なる物母屋へハイランドの志を渡さる。と  
云ふ。大い、身、信ふあり、信ふ、もの、を、採れぬ  
信の干代の君は、我の家へ預らむと、預す、氏去りて

定寝ぬ

十五日朝は、案、おれ、ぬ、を、以、家、を出、赤、女、松、部

稲島大石氏を討つ。ぬ、家、を、は、決、身、の、お  
を、け、り、何、も、を、信、を、す、ま、お、は、の、ま、く、思、  
あるは、我、心、を、す、や、博、月、子、は、物、母、屋、子、信、の、早  
を、信、を、預、む、や、い、の、お、は、れ、其、の、成、り、行、ち、そ

道き、た、り、限、あ、れ

pub. 8.

The sorrow of weed is a joy of plower,  
The joy of weed is a sorrow of plower.  
K.



かきとる

To me,  
gushing & voluptuous  
with beauty  
in Marlow's style

マーロウ詩集を  
読む

六月拾三日 薄曇

朝は染地みれり、歸れば家には伯母君より片紙のぬ  
豊川みれり、新聞を借覧す書意は後テムペストを下讀す  
源氏物語相室の君の巻を讀む、マーロウの「アムニダ  
リアニダ」を讀む、**豊麗の文**、**玫瑰**の詩、**海**の詩、**如く**  
**泉**の詩、**如く**の詩、**如く**の詩、**如く**の詩、**如く**の詩、**如く**  
いふ何れもあつても用ゐる。一玉張りの非難の書を弄ぶ、**如く**  
場、**如く**の詩、**如く**の詩、**如く**の詩、**如く**の詩、**如く**の詩、**如く**  
歸りてマーロウ詩集を讀み終るぬ。讀み始めは五月廿  
七日ありき。声張り上げて、**津瑠理**を讀む。  
松岡の木曜日晴  
午前は別冊を讀む。午後二時より西教史の翻譯  
小信る志、四頁を訳す。午後二時よりテムペストの

拾二時三十分より二時三十分迄 會讀下讀

二時半より四時半迄 講書

四時半より五時半迄 翻譯

七時半より九時迄 會讀

九時より拾時半迄 雜書抄録

土曜日の晩は會讀ナシ  
日曜日は翻譯をなさず



テムペストを讀み終り

下讀をい頁なげます。其後ワルヘルム・マイスター第二の巻を  
於八頁讀む。七時より読本をテムペストを讀む。アクト  
スモシ 讀み進む

於五日全曜の晴

昔は朝テムペストを讀み終れり。平田と家を以て  
歌無年伎をよる。さるるの日本一の劇場あるは  
其建築中の壯觀あり。狂言は忠臣蔵の三段及  
び萬進張天祐金の世中。二人道成寺あり  
園洲の技の絶妙。驚くこと屢あり。出稽は  
の長唄連の装束する事。因三ツクも、又血染  
の婦人をヨク見掛けぬ。知るは身等は見え  
や見られぬ。あやも隣りのますのい、清桂は  
百安せらる。二共四五の婦人を見のけたる。故なる

気の利い風ふりと思ひ、於時道歸を

於日土曜の晴

朝は豊田川あけきぬ。午後は歸りて中島氏に  
マインスターコースを教へ。平田読本と讀む。氣  
持よく師事せられ。夜は豊田川を流る。氣  
持よく日曜の晴

午前には教へる。さるる。午後豊田川に  
きり島を教へぬ。吉之が著書日をも讀み  
おまへの手紙を出しぬ。夜更けて淨瑠璃を讀む。

於八日月曜の晴

朝は染地ふりく。午後は豊田川を讀み。彼の隣に  
の婦人は織城紬の單物。唐糸とさらさら。蒲団との腹を  
帯を結び。さるる。向を聞く。毛織物。読本の海。ふり。リ。主







上野のダイヤノ  
園を贈らる。

我兵成歎の清兵二千八百人を撃つは進んで身山の  
根柢を奪へりともふ。清の死傷五百人の對する我の七  
松五人許の死傷のいさふ。悲むべき事あり。然れども男  
子国のあつ骨を異域に曝すも亦快あらざりとせむし。  
か女のあつかりしを弄す

山月正唯の情

バイロン情を讀むに三於頁、詩集を見る。めま雜法中の各詩  
城の婦女子の頁に感ぜす。梅梅の短歌數種を讀む沈痛  
なまより、優美なるあり、其風情は異なりと云ふ  
常と母をせる一詩の氣を有るを見る。黃昏ヅリームの一篇を讀  
む文辭沈痛悲慘、讀むに懣へざるものもあり、傳へるふ詩  
豪初遊の破れを追憶して、血痕の内を業を下せしものな  
りと、嗚呼彼は其の用日ごの内の一詩、悲相を寄せて、彼

のメリーヤのオ大が無情ある。遂に詩豪と袖を連ねるを得ざ  
りとも、情のこゝろ、我が狂激の罪を及く美人の兼せは過不歸志  
ある者あり、而して、遠人は嫁をて、おふ、於二年、バイロンの勇氣  
未だ癒へず、半夜得た利の旅客の、曉夢の狂をて、異域に滿胸  
の悲思を寄すもの、豈に痛矣か甚へざらむや。然れども  
彼れチメウオース、何者ぞ、其の詩豪が天才を認め得ず、あて、憂然  
一紙を讀みて之を思ふするの、ま目正婦に非ずや、よるや、命運は其  
の前者間の旅人を思ふ思ふするも、詩豪が天馬奔騰の高志は其の  
澤、純の掃と一致を得べきの。初遊には悲、オものたり、逸馬は駿  
ふまの、かく、逸、負、あま、か、如く、詩豪の絶望の域に陥るも、  
ま、は、其の、氣、の、敗、れ、志、を、甚、至、く、あ、ら、ず、と、せ、む、し、と、い、ふ、詩、豪、が、こゝの、運、命、  
其の、志、を、敗、れ、を、開、せ、ざる、もの、あ、ら、ず、や、カ、ス、テ、ラ、ン、は、云、ふ、  
one of those great heroes — youthful, supple, abundant, as a child



with the sword as with <sup>by</sup> fire - beloved by a beautiful  
 woman ~~the~~ conqueror alike in sports as in battle  
 and yet - condemned from the cradle by a cruel  
 destiny to the infernal ditions, <sup>梅蘭の女</sup>  
 憐れみなき命運の手が打たれて信府ある神の犠牲  
 と定められたとていふものさう干渉の早見ありと云ふ  
 可し。噫、一夜あかき梅倫伊を三於三火焼きたぬ。  
 五日々曜日 朝奉晴  
 昔は午前教舎より午後梅倫伊を焼きた  
 六日月曜日 晴  
 昨日梅倫伊を讀み終りぬ。ノールと云ふ人は護りや配と  
 過ごらる人のぬし。梅倫伊の保護中らるる才められた  
 と申す可也。

七日火曜日 晴

稀世名作集の上巻をそむむ。杞腹地倒すらぶまじ  
 夜ふくさる外もよき。紫糸の物と玉部の子別。小深の又助  
 清玉の三膳酒屋。山登勢の犬十を聴きぬ。相変ら  
 ず書生澤山ありぬ。あちちららるる女子をよめ掛  
 けたり。

八日水曜日 晴

朝八時家を去りて自らもし。精屋かみり。お、箱辨がら  
 を流る。種樹もたふたり。当時藤敷重徳の花秋の世帯  
 志みた。梅の舟の音何となくさるの毒まるといせり。ぬき  
 使ふも自身もたふたり。山登勢がいぬをばふぬ。車  
 にかふ二内。梅のりのつらさう。つらまはる。飛舟。舟の夜  
 足跡のぬ。心やまをたふらる。時過。舟。舟。舟。舟。







たのふ侍りしときを離さるるものあるべし。一見そご  
ろお堀の江島屋敷草打先生も思はず。ある者あ  
り。夜におろしは若井も。相傳の二つに。榮系朝  
教の。熊梅の三枝所。以人太平平多の。是は  
いふのしぼりて。少くも重みなく。行きた方全く茶理の  
調子あり。東都の藝壇は。嘗て以人志貞打として  
可へし事もあり。少くも。是は人氣をやらざる者あり  
玉の岡崎。これは水清の。周まらる。我は。貞打  
と。前生との。只あつた。種あり。徒に。眠の。利も  
あり。是は。山登勢。腰。今。鳥  
の脚。待心。然志。女以下。中。……  
……  
眠気たまふ。……

拾四日火曜日 朝は晴れ 午後は驟雨  
予前日其碩集らば。お用紙を。我の早。拾日大卒  
成海衛を衝き。夜。田氏。月光  
を踏んで。不。道。……  
拾五日水曜日 晴  
一九の。阿弥。夜。入。若。茶。朝  
顔日記。熊梅の。大江。小。中。清玉の。蝶  
山登勢の。堀川。……  
拾六日日本曜日 晴  
此日は朝。川。家。は。ナ。江。氏  
の。招待。状。藤。村。子。来。ぬ。世。船。い。ふ。を  
狂。福。す。由。を。故。言。ひ。ぬ。朝。下。方。之。れ。の。務。を。執  
第一。を。書。名。終。り。ぬ。夜



廿七日 金曜日

朝又芝船の字二を書き。フリバーツウイストを讀  
開始む。拾頁讀みぬ

拾八日 土曜日 雨

朝よりツウイストを讀む。午前午後よりぬ。午後五時過ぎ春樹  
来りぬ。七時過ぎ家を出で美代町の青年會館ありきぬ  
室内のは衣飾中々よき所あり。磯田といふ人子遊ふ。  
江に氏の流線は本田廣一氏の司會の下子目出なく等  
しせられぬ。歸宅はツウイストをかき讀みぬ

拾九日 土曜日 晴

朝よりツウイストを讀みぬ。大西日誌。チツケンスは  
さうぶの英國の文藝者なるものも恥ぢず。

廿日 月曜日 日 晴

午前はツウイストを讀みぬ。午後藤村氏訪ひ来れり  
相携へて上田氏を訪ひるをよりるは去りて一葉女史を  
訪ひし二日前より。雑談あり。上野氏の書斎を覗き  
廿一日 火曜日 晴

朝よりツウイストを讀む。夜方大師流林が来りぬ。  
比去よりより流林日記の讀稿をもつ。

廿二日 水曜日 晴

昨日は朝より流林日記の起稿小佐生氏。お村柳村氏  
来り。秋分。諸村夕の秋相次いで来る。吾等界外  
ニ於ての流林集をば五時頃より讀みぬ。矢田氏  
きたるをさかへりある。歸宅は豊川子りぬ。夜方  
就眠前ツウイストの一巻を讀みぬ

廿三日 木曜日 午前中雨 午後雨



朝の内相共式まゝのぬ。後任中島代付のぬ。空内  
の片付けをふたぬ。夜子入りつういふとを讀みぬ。高吟。

廿四日 金曜日 曇り

午前は西川嬢付か来たぬ。まき子金書日を借す。  
午後はつういふとを讀み讀みぬ。廿五時前就眠

廿五日 土曜日 晴

午前ラリバー、つういふとを讀み終れり。ラリバーの性  
質は善く思ふれぬ。云々もふけれど。ナンシーといふ  
少女は餘程面白く思はされぬ。午後三時頃より  
沙公利の第九夜物語を讀み始む。女界雜誌  
百九拾巻を要取る。岩野やら云々人の脚本あり。文  
辭頗る粗慢あり。大概おだは集の輸ふり

廿二夜物語、及びシャープのシエー傳を讀み終るぬ

秋のつたふた。秋のつりけと秋の雨

花のつたふた。野守くき。おはたらみ。  
浦分おろも。花塩のけり。ふつた娘。  
ふちぶりの末。ふちぶりの末。おしん。  
おはたらみ。花田帯。

切子入る。一。お代(三月、九月)

廿月廿日 金曜日 晴

朝のつたふた。久々を以て築地へ行つた。シャープの  
は事をもつた。平田君本立。お代大卒へ。女子の積り  
規則書を二取。お代大卒へ。女子の積り。お代大卒へ。女子の積り











此戴玉、午後五時吹塵を辞す。徑路 雨雨路多  
志て衣の裾を濡す事甚しく秋風雨を合せて松林  
清音を空りす。殊れ亦秋のたのびの一寸と友を飲りみぬ  
録車は晩空を隨をし大船の初を待てる半  
時餘、亦車窓を解び入る西行す。去る月の別れ  
を思ひ出でて、其を色の草のみを清るも暮りあれや。雨は  
車窓を打て滴々玻璃面にあつて、燈は影映むて  
人々の這らぬる根をくわうらうのれて陣からも我々の心  
のらまればや。二膝の驛は草の宿り温るが平塚も  
程なくして大坂の早すきぬ。我々の腰毎に  
は年の次早三於前候あらむと思はるる。回る里の  
紋はほよけれど、言葉何となく下びて、先きの程より大  
坂帯をこの時人を相可何のこの下らぬ事を言ふ

つとむる。其れも去れば、我の何處へ行くあつと聞か、  
相根へと名をいふ。相根は何處へといふ塔の邊へ行く積  
りあつたの宿屋は何處か。宜のらむと自らばらして聞か  
すれば、結城の邊に先づ塔の邊の入りはあつた。出立  
て日く。玉の者の塔の予前か玉の邊としかれ。出立する  
ものあれが之れは、この知らず、其次は塔を登り玉の邊と  
いふあれど、之れは非也。いふ事なく、其れこの今つたるを  
れば、ある一塔ありたは、鈴本あり、いふ事なく、其れを  
あつ先づ塔の三軒の内のあつらむ。福はあれど、鈴本は  
心せよといふ。我々は鈴本の可なりと、互に飲も  
得見合はせず。結城の邊に相根は指す。いふ事なく、  
いんたるがなす。それちや、塔の邊か。相根は  
志よろ。たかこちよいと、鈴本で体むす事か。存











はなはいたく空か。阿は位が少年の下をにりてりト子  
ル帝一濁流奔馬の如く出て来るを見る。宿は歸れば  
典義の由お聞を持ち兼ねたる物とて。室内に横臥  
て西の方の窓より見れば、秋の元化雨飛雨をばぬれて  
淋唄ふこのれり

絶壁の社をけり社の西

とノ人床。秋れもに更清なりと友は云ふ。しエし一の詩  
を~~絶壁の社をけり~~摘漢す。夜ふりては相愛するが女数  
人乗りぬ。しだらぬ事をこよひはりて。花合せの舞を  
不志。今日は中宵で御気の毒様とは。之れ子向の掛  
けられたるか女身ぶ言事あり。秋骨我か向ひて  
社の天代の在るを問ふと上座より。我即ちこれ答  
へて曰く。我寺の先き程秋骨の歸るる台所

絶壁の社をけり  
を神板と云はるれ  
於此は中々大を  
くあれ。然れを秋  
紫いお夜まじの  
事あるよ。子を産  
むとあふもいんや  
くさるまのわい。小  
児は死ぬを恐れ自分  
はし舞をばらぬ。髪も  
多くけり。おねをけて  
打のけり。踏んだ中  
の

絶壁の社をけり

の方で何のあふくつて座った松子では、結の女の古  
る事は確かのだらう。と、結れ舞舞不安の有松  
と、其れは其等の事あるら。思へば可笑し。のらぬ  
事もあるし。民友社の目的手解の自果ある由を馬  
と醫自社の病老の件もあふね

五日直平氏生司我子同をて云ふ。君全れの上は何人ぞ  
と、結は明女事校の教習え何のこけりといは。さ  
らば今日申馬芝をすまふの事と言ふが能い。腹言  
ふよこのといふ。我は屋敷をい。と云ふは結を  
きて合ふ。曲三川と渡りまふと教習。歸室後山坂を素  
白き香る方の草花あり摘むて来る。鯉釣をりく  
獲るはあし。松の山に登る。屋敷の屋材能ある。身  
をければ事腹より引歸す。友は後より。熱松は野











はたきす。海辺を歩き、市街を歩くと大久保神社の登  
る。海山の風光中々善吉志、教海通の流船  
は烟を吐いて彼方より来るを見る。於一時前歸宿  
書食後宿の息と換る。一時字をみる。舟の舟を出  
で歸宿の舟の上る。國府津の舟暫時待ち幾  
多の驛を登りて京に着せしは午後二時迄を  
き。此宿の破屋の内か食する。麦飯も我ら必  
とる。中々自きも不思儀あらや。

拾五日土曜の早雲の雨  
朝の宿を登りて、五領に力の疲れを記す。粟一升  
も身を食す。午後は粟を食す。夜も入る。舟を  
ゆく志の續稿をものす。事記を、向をみる。

拾六日晴  
此宿 dragging の有様あり。

我木来る。相伴ふて教會に出発す。上野を  
散歩す。午後には心をくしむ。を書き、中々自  
行の舟。夜も入り、舟来る。一宿大更深くふ  
る。舟も大に疲る。

拾七日 日雲  
朝の舟に乗り、午後舟の来る。紀行を見て、  
甚し。イラ下不贈り物せ  
し。心。我れが志を傳れむ。舟の舟を  
舟の舟。神保舟にて。難志の舟。舟の舟。舟の舟。  
舟の舟。舟の舟。舟の舟。舟の舟。舟の舟。舟の舟。  
舟の舟。舟の舟。舟の舟。舟の舟。舟の舟。舟の舟。

我軍、平定  
大勝を得る  
清の死海舟舟を  
將士の之れを  
其の事



我早の死言は僅  
々三十有餘今湯  
すまふ。

雨の音の声いとこのふし 秋の連  
衣手ささむ 秋の連  
恨み住び 秋の連  
さく行く月ののけり鳴くらむ。  
露重きま 秋の連  
風の音の 秋の連  
曉の夢 秋の連  
秋の寝 秋の連  
踏方 秋の連  
見 秋の連  
降 秋の連  
秋 秋の連

於八日 秋の連  
朝は築地 秋の連  
取 秋の連  
平 秋の連  
吹く風 秋の連  
於時次 秋の連  
於九日 秋の連  
朝 秋の連



不歸しては豊川を行き少女の爲め骨牌を弄す。平壤戦  
勝の号外續々出づ。夜に入ると戦死者の名を公せしむる日々号  
外を見る、一戦功成つて一骨枯る。且最後の決戦あらぬ令の  
一不戦不戦死せる人々の子母は憐れむに堪へたれど何  
れ一度は戦死せざるを得ざる秋の甚女の共か。かく言ふま  
く勝戦場裏に骨を埋むる壮士はもろろ其の本懐の  
あふる日取期をば遂げざるならむの。

夏首一の志げみは骨の捨てまらる。

人生、空しく敗卒とふつて、衰死する勿れ。

骨を埋む胡砂も照るる今日の月。

垂柳秋風ふふし高麗河原。

花不凋ぐ血汐もほれ高麗河原。

ますらをの駒引き止めて

高麗河原の夜

秋はに、うらあきものを虫の音。

山脊せて、鹿の蹄このふふ秋の風。

塔の澤ある千手塔の影を消すを消すを思ひに掃ける。

秋はまだ初めの風は寒のらねども。

村雨散り浮く百合の花はらは。

谷川の水増ますはの泥子けがれて。

流れの末を訪ふあまのあき。

一年のこのよみの橋の次女のこのあき。

駒引き止めて人渡せば。

千年の鐘に、あだをさるる名のみ、玉の緒の断れど

過ぎ去る雨夜の波、高く、もいさあや

嵐をたれきて跡もふし。

心に残る面影一ツ。



いんのはきへむい頭の思ひ、  
袂をんらね、手をとるともあは志、  
共の心みあ志、花はふくととも、  
昔も後にも橋はふくととも。

観じ来たれば、一々

逢ふも草花あり、別れも草花あり。

蟋蟀

ぬい目を執れて、秋雨のはだるをさるこの

さるをさるこの

ふけりく夜半、小首十の戸近く、

つれなきせよとよむいこのあす。

我は又逢ふ事、信じては破れ旅、

いりあまはふる、封をさす、

いくらふ方も、~~あは~~らあくわ、

黄月小送、~~あは~~はまた、

幻、迎ふる、~~あは~~のわら、

あはれみ方、わが身、悲たまひ。

父よいと志と、歌のさる、  
中夜をけし、枕のたし、  
通るあはし。

落はせと、老ひと志、  
歌をはく、まぬ、

就眠前、ドレエの、  
寝王を、  
讀む、  
教る、



昨日不晴る日なり

朝は風も雨も利く途上、我海軍の海軍島近傍に停り於て清艦  
於二隻又と戦つて其の三隻又を軍艦沈没、一隻又を焼毀す  
たるとの報を見たり。午後は雨なり。我軍艦は西  
稿を訂正す。晩方旭日の号外をみる。我軍艦は西  
軍丸、八重山比佐いの三隻被られ、負傷者死者若干  
あり、敵艦は多分致遠、揚威超、勇の三隻沈み、  
他の一隻焼失せしといふ。揚威は金玉均の屍を乗せ  
て朝鮮に送る軍艦あり。

秋風船日に向志立向露島の海。  
海原の砲煙みちて

相子木の音さへて行く雨相夜二のふ。

四時頃より原稿紙に「子をあつくし」を書き始め、  
九時頃まで十六凡六枚認めぬ

まよふづれの袖くちて、

一雨あつちやむりのまらさかすす、  
我草のて屋の、床をけりて、

声のあつちけりすづくまらう。

就眠前廢王を少々讀む

此書日金曜日自筆  
朝より「子をあつくし」の清書を書き、午後は島

崎より三座の義我太史を聞く、夜入り吾妻橋を行  
き、清三座の義我太史を聞く、最初、行の術所  
例の如くせき入り、文内、紙面の如  
夫との評あり、次は、小澤の儀作内、場、先、人

午前秀木  
まらう



先づ善才あらむ。大印の青の團扇は悲  
愼服の外なき。宗清の言は彩あど。懐  
憤の状眼も勝れる如き心地せり。三味  
見もも勝れる如き心地せり。三味  
あるもの如くあやうの如く。善く歌と相  
とある何れも。秋の骨の移されたる  
る時もあり。秋の骨の移されたる  
れを如く思ふと。余もさうやうも  
藤村と袂を別ちて上野まで。徒  
舞を乞ふ。家のまゝ。就眠せしは  
九二日土曜日晴  
秋の哀れ漸く深くなりぬ。八時頃秋骨と共に

上葉女史を訪ふ。止道痛の由きて大  
られたり。劇夜の續稿を来れ四日の朝  
の多へきよ志を申し入る。天知子の  
廣まり居る様子あり。歸宅後豊川  
良平氏より。智恵子と骨牌を弄す。家  
は上田氏及び藤村来れり。雑談を  
前夜を出で。不忍池畔を道途す。秋  
を吹きて。傾陽敗荷を照す。妻京の  
となく良れを催す。村あり。藤村濃  
青空と境する。を指して。風景あり。日  
画いて。雨を添へざるは。目大目小  
いぬ。家の外。紅葉著の茶といふを買  
晩人良後外出。紅葉著の茶といふを買



ひまぐりて、其の水陰の琴といふ一編を讀みぬ、  
秋の雨路と題して、文子界に掲載す可き、  
歌どもを集めぬ

九三日々曜日晴  
午九時過教會十行のんとす途上、平田小  
逢々屋野々白景、片秋片次し下、遠くは  
詩教刻々午後皆去る、此系を讀む入神  
の筆下時々涙を潑ぎぬ

死馬の骨五百金、  
遊女のほねをめぐらさるや、  
破れ三味線

見のへりの柳と志武青の宇が、

誰のまん  
秋扇の夜は  
誰れも  
誰れも

伊那  
所の夜様 朝の雨を待たず  
誰れも  
秋風の破れ  
はあれ  
の骨を

ねれも昔しは、ふほ柳の  
枝もあられる月の眉、  
吉野の春の花の玉  
うほくろ  
一点の朱辰の  
雨而れを可  
蝶の習其のそれ  
はあれ







戀ハ身をくふ送血袋も  
縁ふければ、顔正ます。

実まおければ、うそもあし、  
清けをひさぐ、勤めの身。

業平のものも、勤ふ男も、  
同志流れの、うたのたよ、  
肉の下緒、く度又このの、

解きま逢瀬、頼たまきぬの、  
鐘を恨み、人はいさぐ、  
心はいさぐ、あらはねば、

骨を抱かめ、石をもくへ

次郎をも

そいふとすると、我は思ひ入る。

思ひ出つれば、昔の共や、

温か柔な郷の床のろろ、

枕を抱かめ、男の心を、

骨を抱かめ、魂の、

行くは衛も、知らず、あそび

~~ころくばのり、榮華を、  
ほろとふは、甚も、  
朝の風を、好まし、  
鐘の音を、衰へ、  
秋風、瘠れ、肌を、~~



蹄のよりあき馬のしん

瘠せ九巴赤、瘠せ九り赤、  
月すすあせば、哀れや赤、  
赤色をせり、骨と皮、  
河水あうりあえ、あけの、  
あやあせあせ、あせあ、  
髪もこのれ次女もとちて、  
我あふら我と驚く。  
顔あよあせ、あせあけそ、  
津ああせ。  
肥馬金鞍の人見れば、  
過ぎあ昔しの冬、の夜不。

~~振~~

金をばあきあのくにてらんく  
面よりやとあせあせあせ  
無骨のあやくの今の身ぞ。  
車の上の奥様すのた、  
あ、これと思ひた、  
我金や皿のそのむこのあ、  
我足下あす、あのと居て、  
人あも知られ人も呼あひま、  
あせあ者のあれのあせあ、  
知ああ。







眼中花おく月もあつらひい。  
たよむ夜秋風、早の針目之

鳥肌子いいやり

冷もよおせんや、厭はあふ  
我を捨てては、於年の暮の

羞耻をも、研り、女を投げて、  
涙を笑ひ、誠をけいごの支

女もあそ、女子らす、  
人をもて、人すあらぬ身ぞ

黄令もよおらん  
かろまよせぬ我の  
三千の物徳心  
其の  
破

聞けや、三味の音、破調の曲を、  
花の廓、幾年の海世を、  
浮世を笑ひ、太夫の調、  
実も捨て、偽もあふ、  
無我、思、今、の曲、  
大名の座敷も、富田西貝の  
富田西貝の、座の騒ぎも、  
心をあさ、ぬ、傾城の、  
血太保、いもる、城夜の調、



我金盆のふちを翫らせよ  
今日の月よそあられと障子の

骨をせ、骨めせ、遊女の骨を  
カミヤカ。

粹おそくして粹お死す、  
粹お埋むされおらんべ、

面もくをせ見えへおとも  
和雅の香りの素れとは知れぬ。

死馬の骨、赤金、

遊女の骨は何方金ぞ。

行自若れて

生を秋の上風まきまきして、蟲さかさひひ

秋風高く秋肥の多し持たれ、  
まねくす、ハオの舞を舞

序縁もあらは納め破やんせ、

雨ふされたる骨一堆、  
浮世の秋を流るる片をむ。

雨路

廿四日月曜日晴

朝久方訪ひまらぬ。九時迄一筆女史を以てするを  
は郵送せりといふ。歸れば腰帯をまらねり。砥三味  
線の訂正をす。赤木氏午後参りぬ。天知氏の紅蘭の







思出如然  
窮

此露哀虫 湘水 一輪野花影 愁 眠  
堪憐野色傷 骨 斷夢空迷落月 辺

今上  
此崖幽歎有誰憐 野州花香夕雨天  
西嶺潮声引恨慈 旅情凄切早川辺

午後書可なりきり 氣血衰を感む。西川若村氏あり。家より  
歸りては吉村、早村、西村より祝書あり。吉村、早村、西村  
の家へ前二首を録して書状を又宛ぬ。夜に入り子を  
いづくかの満更務をものすか。もるここのり。早村の  
わし跡の苗布を著る。むの田のゆい。録りよ。早村の  
湯ごしはと。むのふし。このゆい。早村の半位。録り。  
北七日 木曜日 晴

昔は午前九時過ぎなり。みをくししの續稿を取り掛りて  
書き續けたれど、かゝる面白く書けず、兎角休みながら  
て日暮過ぎやば津く三頁半はこり思ぬ。夜は引續いて書  
き終りて頁ほらぬ。北八日 金曜日 晴

此日朝は八時頃おぼ起。別がふす事もなく日を送りぬ。下  
田父及び久方来れり。今人の心事、又子情れむ可き者あり。  
北九日 土曜日 雨

此日朝築地に行き、教會勸定の通弁に役せられ、午後三時  
頃、歸家、新聞を讀み、黙想をなす。時間を経て、  
て、夜に入り、書をいふ。この十部八を思む。脚色も面白  
らぬ。しるよれば、一雁心を考へた。子、為め、子、描筆せり。



昨日々曜日。朝より雨止めのやみあり  
午前時過寢起。小舎を兼ねり。教書千行きぬ。フコキヤ一の  
説教を聞く。午後には小舎を兼ねり。新編紙を讀む。隣家の  
の婢。来るまで二回。婿着を合むて去る。

降る雨や雨踏まほあるふ秋の心

百日紅の花が散り残れる雨の思ひは  
遊女の化粧せむ女あやうき思はれければ

傾城の紅の粧やさるる女あやうき  
さこのり久未。志ほれをこのとす江の池。

早稲田文幸。明治文庫。等を讀む。  
戸川秋骨。書を先舟せて。玩るる志。昔々を身見たるといふ。

朝顔の露路はうきよの次女のふ。  
もろきもの花の命の野辺の雨路。

秋さめふ散り行く秋のまらるるふ。

降る秋雨のほろろ散り行く身のその果は

泥りまみれてやれ。て歸るは元の塵ふるの。

おれ見やまやたせ野辺に咲く花の命は脆いもの。

ある志と縁とは知いで。のしの珠へる雨路の玉。

秋風が今は落さおむ秋の心。

おふこの重み。猶更重むお縮むはねくおこの

命を。わた志の為め。お縮むはねくおこの

はふふい散り際を早めるは。のちやふいこの心。

わこおのやうさ。もろさざる。お縮むはねくおこの

長きお女の思ひ。お縮むはねくおこの

おまいのへせは。お縮むはねくおこの



るみのむすびのあへい ~~果て~~ 進瀬

同は因果のころむ身は

そおははたしくもわきは散る

わあ母はよらぬもそおは消ゆる

どうせむすまはる悪心因果

いんそ二人でもろとも

散るもいとわぢ、消るもよらんや、あは

金志川瀬の元の海泡沫

鳥のささやかへわたる、鐘へさりとなく

催はせは、鶯ささむる枕辺小虫のささ

哀れふり、見へ志は並々の現のや

九月の晴る日晴

~~筑地~~ 築地を行きぬ、早稲平の春を

ふりし難法す、王知子の紅闇の燈火を

の草履ぬぐふ、いと、はるの夜に王知子を

二百八日晴

朝築地を行く、海へ懸け、休みあり、去って野崎を

雄氏と語る、事と食、馳走するあり、正太の

紅蓮の男、あつらを借る、夜に、夜に、山登

の美我、大ま、吹抜、亭子、園、日取、初は叶

何、語、居、時、あり、山登、勢、下、ま、た、さ、ひ、お、

屋、か、く、美、根、送、住、ま、る、玉、と、徒、居、す、小、重、子、の、

藏、下、屋、敷、は、元、程、も、感、服、せ、下、之、れ、も、真、打、る、と、







来りておさよや無邪気の笑ひ顔を我勝み  
上のもも志ほりなく可愛きまもあがり。

おさよ子あがりたやけあのもの思ひ。  
笑顔の上心の塵も洗はれて。

お父幼見を仰へみまも半襟次女のいのちもをい  
まふけりしければ言おのみまもあがり  
いはば教者あらめて耻の心をうら打ととす  
らま。

秋秋の色もさるや雨のすら。

夜へのけて野守くさを扇務氏お傳する  
又は其支さをほへぬ。夜みなり豊るを太陽す  
六月土曜の晴。

午別於一何處まなり。午後二何迄久方訪り  
園行を思ひまきて行く下りまきめぬといふ。

身まもや秋風を切る人ぼのふ。  
空れしく雨をたか雨鵲の雛。

島崎のめまらまき。秋骨のむらぬ。三  
を推さす。夜みなり時まる。外を教者あ封筒  
状紙を思ひまかりぬ。

七日々曜日曇

朝は豊川にて送らぬ。午後三時半家を出る車を備ひ  
向島に向ふ。秋風冷し衣を吹いて。江上の舟帆  
いと林をげたり。牛の御前を知らずを人か  
ま靴のまき長堤をまら。おさよ同漸く  
を教者路を茶亭に固ふ老翁あり。想切道



指を日く此地を去る所なるを常夜燈あり其の道も  
曲くも行くまじ又所餘りて交番の地なり之を在り  
由ありて行きはは秋後天神社あり温泉は其の境内  
ありて馬場とて北行するさと教寺あり堤下の舟中  
小舟あり馬場とて北行するさと見下せし地まきの  
まは正志く四所陽金加紐の公幸なり秘秘すればは  
れ由神村子の友を伴ふなり即ち相酌みて大  
矣す共々あるを牛の御所の前を過りて交番あり有  
る所はたす先きの老翁の教へられん幸もそはは  
は又巡る者なる同分地も又いして重なる前路を  
老翁望むるなり其の地は多岐懐失せし所な  
り又杜若神社の鳥居は前子来りて奈老翁の老  
婆亦有馬温泉は何方とていへば其の御手あり

ありといふ進むとて数赤門柱の有馬温泉の地  
あり其の地を道に引くと三回餘りおぼや  
神村子を顧みて是は何れか生れおぼやといは東都  
の築地を生れおぼやといふ者く東都を生れおぼや  
て地理は詳しおらぬ者あり其の地は東都の  
傍を流るる河ありて然也田舎あり十日位を期  
志て貝物お未大人の力が我々の知らざるを  
る事と甚志し神村子日くまれおぼや云々車中  
中と能く所々の云はれを知りて其の地は東都の  
西より談天の内におぼや温泉の境内におぼや  
果ありて出向る屋野人は来てはたやといは  
はあ湯連中ていふもやいふものといふは  
湯沸るるを持て先きお立ては、其の地は右の力



行多也あり一松あり、中々閑静あり、傍の二階の  
離れは戸を明けありて中より若き女のやせたる  
き代声のうらみの漏れ聞ゆ、之れまたはお連れ入  
の風流の助あり、さる無のうらむ、心の中微笑せり  
余等は其の南ある二層の樓の二階の首すのれぬ  
但之れは第一層は扉を建てられ、左は二階へ  
上る方が順なり、其下は窓より掃下の感ありと  
知る可志、入れは産敷、まはこゝろ、禿木の二民あ  
るのみ、意は、まはこゝろ、余は、早集まりて、二三の  
戦は、まはこゝろ、ありて、手たる、足びる、者も、あは、し、と、む  
思ふ、老子、禿木は、暇息、およ、りて、空城、あり、り、自、歎  
は、春の、日、う、れ、く、血、然、ち、り、聞、く、禿、木、は、自、白、の  
皮、及、び、第、一、層、まで、獨、り、不、聊、を、感、ず、る、事、と、其、其、夫

あり、と、む、と、禿、木、を、さ、て、云、ふ、映、照、せ、何、下、の、田、を、出、す  
所、は、あ、る、か、や、と、あ、ま、り、さ、て、云、ふ、我、れ、鳩、盟、館、を、楯  
と、す、じ、は、れ、又、曰、く、向、左、の、う、ら、ま、は、中、の、風、流、が、あ、る、と、い  
と、然、り、ぞ、ん、ち、あ、は、と、い、く、わ、知、り、て、は、る、よ、お、あ、ん  
と、入、る、時、み、ち、よ、い、と、睨、ん、で、四、面、を、見、た、衣、大、に、笑、ふ、  
廊、下、に、あ、れば、田、野、は、皆、黄、葉、ま、る、て、折、り、く、目、々、り  
百、十、五、鳥、の、さ、り、れ、と、い、や、物、を、び、あ、る、の、地、す  
我、れ、禿、木、を、見、て、云、ふ、昔、の、海、は、く、山、は、く、山、は、く、  
望、の、先、禿、木、を、さ、て、云、ふ、と、い、れ、禿、木、が、我、れ、下、り、  
と、映、照、せ、の、後、者、を、問、ひ、る、と、い、え、へ、あ、り、映、時、  
り、北、方、の、あ、や、は、げ、あ、る、冬、の、雪、占、御、言、う、初、め、ぬ、入、口、者  
と、い、と、う、ぞ、映、が、へ、と、い、ま、声、を、け、れば、そ、お、く、を、見、失、も、ら  
不、詳、服、を、ま、着、せ、る、肥、満、の、紳、士、を、え、爾、と、い、て、入、禿、木



ねつ之れ下次ぐは秋骨をりふほ能く見れば紳士は  
 未耒のドクトル太野酒井宗匠にあり我大志味んで  
 云ふ洋服を着て来たから何故のドクトルのと思ひた  
 う君のいと豊大映然たり。次いで彼の一種の歩  
 き方とてアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
 秋月も酒井は芝下道で平日は公に問ひたいといふ  
 定めを今日其有馬の塩泉を知らぬ奴の来る目か  
 と驚いたるふと相ひりて放笑し青丹夕敷子  
 湯志、秋月も酒井、藤村及び余は之れ下次ぐは  
 風呂村はあまかり房のうすうす酒井あり上戸は湯  
 下次の室より湯をまるとり湯は熱気帯  
 ぶると甚く且濁りて一種の臭気ありあこの  
 も人衆の以て自來あり。眞如一教の風呂場不

獨特

象

護

が悉く似たり。雑談中天知子入り来りぬ、子は白ふ  
 だき子後れたり其の代に贖罪金は多分持て来りぬ  
 といふ其本地の贖罪といふを聞きしは其も義  
 解をて大い卑怯なりといふ然れども勝罪とい  
 ふは贖罪刻子對するのさしあうと説明せられた  
 子衣を脱ぎて来ん木を穿ちあする来ん曰く今日  
 の當りは如何なる金を先づ其の因をて来る  
 明かして置置きた志と天知子も笑をて曰く  
 諸子と勤をて天知子とさうとさうと合は  
 ぶ此項は鬼角さうとさうと日説の所は折  
 るれば君が明細の説明を聞かずんば安ん  
 難き事とて天知子も笑をて須臾もて三子去  
 己我一人残りて天知子と語り柳村子入り来り











と折れて舎は地面に墜せ落るころ幸まき  
下り危候あるに由はてそのとあるのぼあま起す  
上りて此れ出でてとてさうか教書の前には廿垣  
ありて之を擇ぶざる可らざる相か定む掛什願  
が物さやく梅の枝うすぐりて相か定む掛什願  
みればまだが梅の枝うすぐりて相か定む掛什願  
子まれば安老をて息む肉金く拜まじぬ直さ  
席あへのうし圃ばは秋の月お柱を傳つて余は侍の  
けくも下りてとていふ燈の前お手を出せば傷つ  
く幸甚と云衣をさうぐはは相か定む掛什願  
一りて一面のばらうりてこれ善志梅の樹を  
さすもあまの相共お咲然たる  
羽散れて泥おせ流る込む孤世の糸

段

命は先張りの惜を4ものに見ゆ、柳村はいふ余の  
下りて方は地三本をさるをキウスの如きと、余は自  
ら狼狽せし事をいふたふのと甚志と、天和子三  
魂の地裏の冥験談もあまの首の地和良の記も  
出てみる一産賑のあまのうぬ、九時頃泉出で歸  
途か上りて  
提燈の二つ列び行く、狭路のこのふ  
と相共お笑ふ、狭路を角りて牛の角の列り出  
で里の垣をよぶ、牛屋の渡を渡る、長工は  
さる流木對岸の家をほ、燈火眠りて、恰も小丘の  
如く見ゆ、天知子の手あする、燈は焼けて、水  
お投する、天知子、水お流る、水お流る、水  
白く、水お流る、水お流る、水お流る、水お流る、



流燈の明りさびる渡り口

天知子叫んで云ふ敵は此對岸にあり我人は今夜

攘を略せんとす

夜半三軍長江は渡らば黑夜の事

此夜あまの命ごとく、鏡石のもさすかか物のなれ  
を感志してグレイが秀句を徴吟せしむルアガ上  
も思ひ出されて哀れあり。上陸後山谷橋を  
兼村木に別れ、余等は南行を、我は早夜  
秋久りと手とは東行を、歸途を急ぐ、於時過  
上野の邊、其志たふす酒竹と別れ、又無縁、下りて  
柳村子と別れ、我が郷は午後於此の

いささか、氣を回さるす、我れ、

知の件を流す、有馬温泉おぼは道分は組みの質

素不者より箱根ふどとはまるる、吾等かやうだぬ

志ある、今夜は中々の愉快だ、只、怨むらんは之

れが、鴨、盟、館の、鈴、木、で、おの、つ、た、事、と、秋、骨、

消、滅、と、志、て、彼、を、か、若、志、そ、う、ら、僕、は、完、膚、力、を、

あ、む、お、切、せ、ま、く、ら、れ、ん、と、然、れ、ど、も、若、志、本、東、得、し、

く、人、は、目、を、野、の、影、を、子、を、其、の、首、を、れ、れ、る、出、嶺、子、伴、を

阿、ま、か、決、志、ぬ、其、代、種、々、の、笑、話、の、内、い、ん、ん、の、ハ

朝は雨甚き、於時前寝起す、於此川迄、秋骨

あり、余は、隣、家、の、お、女、を、流、す、お、女、と、後、る、相、更







同安正平の事。推五中を藤原登まらぬ  
 三人ありて移る世間淡をあらして  
 て歸る家よは女まらこのの標榜の合印名  
 を大きな米蔵のりたりぬ。晩方干秋女の書  
 を書むむ若も待人の池邊に  
 同情の心禁を待りて  
 秋夜を行きそて  
 鎌倉三代記に叶  
 の美教の曲を  
 青を固の丸身まは凡るを孝子人の松ま固  
 へぬ。山登勢の表言感する子銘あり  
 此れ歌は感涙の流るる所とありて

悲亮の曲調はや秋の月の前。  
 三味の調の沈めるもや月  
 につけて置く三味も通ふはや秋の月

拾日本曜日朝集本晴  
 秋月朝訪の早ぬお文新前を持ち来りぬ  
 寝よのら之を待む。於三時秋と共みあてし  
 中通志坂の口大服屋まてがス糸お歳を一反  
 買のぬ一時出でく之も函出領の何を送り  
 ぬ。おちの事をも載て秋分の日び天代を待す  
 袷地を妹も送らむ夜はさし  
 百舌鳥啼は枯れ葉ま風子あれ行く  
 夕家名も忘れぬ鳥の庭子鳴く  
 秋風の破れたる琴行を吹きまあり。







我を歡ゆせり、時過るに秋風月来りぬ。燭を添  
きて月前を語らむ。

月清なるうき人の上を田心ひやれ。

今宵の月の雁もさる歌讀ますし。

いざ来ませ月下ふる酒酌ますむ。

拾三日上曜日雨

昨日午前秋骨去る、午後は新聞を讀みぬ。お  
父をばくまらぬ、みをんく志を4時迄、お  
ぬ九時前雨を衝いて吹抜を行く山登勢の蝶  
八中々子面白のよし。

拾四日上曜日曇る

朝よりみをんく志の清書日をあきら、夜子入  
り豊川の連中の御供を吹抜へ行く、相蝶の

大十山登勢の松玉屋敷を直ぐ面白のよし。  
峯先の三味泉は中々上座せり。歸際子泉  
屋に立寄り相蝶、明日来ませ、由を申せ付けぬ。  
於五日月曜日雨

朝よりみをんく志の清書日あきら、午後  
走時過、車を積屋所なる稻村の家を訪ふ、不  
ちり山登勢の方、おとするお美根先の逢ふ  
今宵来るよし、おとするお美根先の逢ふ  
れとゆへぬ、時前朝、平の木来る、  
四時過山登勢の美根先、陽去、相蝶来る、  
夜ふ入り相蝶、陽去の太は山登勢、山登勢  
美根先の朝顔日記を聴く、就眠せしは  
於時過るよし。







つるつるのぢやたるや障の子。  
二人あて落栗拾ふ秋の暮春。  
風ふあうき人の波の六日。

夜十入り豊川に行き、智恵子の為め、骨牌の  
相手をして遊ぶ。九時退歸へりて、みそんくあじ  
の清書、ふすまの二枚は二のり。

拾八日 木曜 日雨

朝は晩く起き出でぬ。みそんくあじの續稿を清書  
す。晩方通りを散歩して、ケッケスのクリスマスカード  
を買ふ。うしろそえを讀む中々面白志。

廿九日 金曜 晴 午後曇り  
廿日 土曜 雨 午後曇り  
廿一日 日曜 雨 午後曇り  
廿二日 月曜 雨 午後曇り  
廿三日 火曜 雨 午後曇り  
廿四日 水曜 雨 午後曇り  
廿五日 木曜 雨 午後曇り  
廿六日 金曜 雨 午後曇り  
廿七日 土曜 雨 午後曇り  
廿八日 日曜 雨 午後曇り  
廿九日 月曜 雨 午後曇り  
三十日 火曜 雨 午後曇り

行く秋やうそ  
の女をくろま  
す。

廿九日 土曜 雨 曇り

を同合せ置れたる。朝かぬ、午後歸家、みそん  
くあじの清書を讀む。

廿九日 土曜 雨 曇り  
朝晩く起き出でぬ。みそんくあじの續稿を清書  
す。午後人あり。積雪あり。夜はみそんくあじの清書  
を讀む。朝はみそんくあじの清書を讀む。

廿九日 土曜 雨 曇り  
朝はみそんくあじの清書を讀む。午後人あり。積雪あり。夜はみそんくあじの清書を讀む。朝はみそんくあじの清書を讀む。

舞の子のえはあはれん



虫の声ふるけ行く月や雨露の夜。  
 姫鳥の色紅ひの夕日一のま。  
 花落ちて下まあきむむ秋の風。  
 くれて行く木梢のあまの聲。  
 庭あれて枕の虫を聞く夜のま。  
 菊咲きぬ浮世はいつの秋の風。  
 降る雨の羽舞はけあ秋の蝶。  
 雨路あけて虫をくく今日秋。  
 虫鳴もあまの三味の音秋のま。  
 秋雨の火桶もとめむ三味の枝。  
 暮れ行くや秋は今日と虫の声。  
 秋の雨やつき人の文を函ふさぐる。  
 雨露冷む志月ふかけ行くすき原。

行く秋の  
 別れ夏を去るや虫の土声。  
 行く秋やささ、寒心人の筆末の跡。  
 夕暮の秋の思や雁の土声。  
 午後一時過曲の...  
 西洋骨牌を弄す、娘婿の...  
 るは又一風流とや云は...  
 あらま止、日記...  
 顔のくす、袖の...  
 此日月曜日朝来晴  
 昔朝は...  
 不...  
 上田...  
 軒...



讀年 大考 文科 終て 雜法 登水の 終つたものと  
出さぬよ 世事も色づき ぬ月もよよふ  
菊の香の 涼の秋は 秋のころもよふ  
秋のよよふ 菊の香の 涼の秋の 香  
前次 終つた

翼折れて 蝶も 飛べぬ 菊の花  
吹くころ 小腸 破れあつたの 秋  
破れ衣の 袖も 袖も 朝の 秋  
自れ 菊の 香も 菊の 香  
夕陽や 雁の 空を 飛ぶ ぬ  
おぼろの 月夜も 遠く 雁の 声  
歌 讀年 終つた 菊の 香の 涼の 秋  
の 香の 車も 菊の 香の 涼の 秋

宿雨 晴れぬ の けらふ 雲も 是は 秋の 首  
筆も 折らむ 秋の 首  
落ちて 幾浦も 沈む 秋の 首  
心れも や 秋の 首  
思ふも ふく 秋の 首  
亡す 人の 画次 女 思ふ 秋の 首  
さめ 行きの 恋の の たの 文の の 首  
昔の 秋は 秋は 秋は 秋の 首  
思ふ 行きの 恋の の たの 文の の 首  
戀は 一時の 假情なり 一の もの の 首  
行路も 跡も 洋の 秋は 秋の 首  
秋の 首の 大なる 秋の 首  
我は 秋の 首の 秋の 首



るおどく感下。竹の北事集のあけの賜をさくら志。暗昧を  
のうら。晴りのふあやもさ。汚れを弄ぶ。浮世湯境と我との別  
は言にも差違事さるやうな思ひのさ。これは聖と善  
之れは言ふ事ありと。始めりとは別をさして。あやもさ。未を能獲  
するよとさ。これ。始めり。再然と別ありと。思ひのさ。め志は  
吾れ心のこころさる事あり。信と之れを許けんとする。念慮の起  
るべ志。我れ對志して。津さる事。雨親は老いたる。我れ猶も  
とふ。汚りはさる。情欲のさる。言ふ事。千刀さる。生流をさる。心  
得可志とさ。すは不都合を千刀なり。鬼の極あり。人間は生理  
生再然も満足させざる。必女ありや。我れは深く知らざる。と。思ひ  
のさ。思ひのさ。は。自の。時ありべし。修し。中の我れ事。さる。此の  
如し。心得。修の。行め。思ひ。生流。如何。雨親。如何。  
廿三日 大曜日 晴

上

朝は築地をゆく。午前於時次。陽崎の氏を訪ふ。右田眞彦  
氏あり。一。朝報の件は。思ひ。道は。ね。ま。た。合。さ。ず。と。の。事  
あり。五月が。くらぶ。山。と。桐生。眞彦。の。お花。津。を見る  
午後。四時。湯。歸。宅。せ。り。夜。小。介。自。殺。論。の。清。書。を。あ。り。ま  
す。豊。山。の。行。き。入。浴。す。骨。牌。を。弄。す。お。父。は。田。井。と。種。物。あ。り  
あ。と。と。大。子。願。ひ。は。な。り。九。時。前。歸。宅。か。又。清。書。を。あ。り。ま  
す。無。難。想。念。齋。齋。と。お。は。し。ま。り。ま。す。  
野。合。の。う。た。次。女。さ。び。ま。り。一。つ。  
廿四日 水曜 朝雨午後晴  
朝は築地をゆく。一。昨。朝。明。司。後。地。方。不。激。震。ま。り。志。由。の。報。を  
讀。み。ぬ。於。時。次。湯。歸。宅。自。殺。論。の。清。書。を。著。手。す。藤。村。未  
の家。事。益。難。雜。の。し。も。い。ふ。久。方。ま。る。二。氏。若。さ。る。そ。の。英。文  
の。清。書。を。讀。み。け。後。田。眞。彦。小。介。と。修。り。陽。崎。の。へ。み。を。い。ふ。



想海漫歩 無事 都道せり。

夕暮や誰もれくる草の軒。

あふさぎた 秋もれれりく 蟬の声。

離菊の一輪まぶる 秋の風。

行きつれてすもむすぶ 秋の風。

西路のまふ 寂寂 山田守り。

秋風のこゝろを吹いて 蹄は黄あり。

紅葉見に行のぼり 秋の塔の譚。

友はいのふ 落葉もや 虫の声。

風やせし 山黄ばみけり 今日の秋。

鹿の声 山田の庵も 雁踏あけ志。

誰より 浮世と忘れむ 風の二目。

秋雨 霧も 次女さびあや 夕たのす。

知らぬや 今年も 秋も 一葉より。

木の葉は 秋は 行きぬ。

誰か 野は 秋の 声。

夕暮 秋の 海。

六丁の 漢まの 秋の 風。

起つて 舞ふ 秋の 声。

西路を 解ふ 秋を 声。

夕暮 蝶 秋の 声。

夕暮 のれて 秋の 朝。

行くと 秋や 野も 山も ありし 風の 声。

行くと 秋や 人さ 物思ひ。

秋を 惜む 女の 顔の やられ 声。

行くと 秋の 羽 破り 人。 妻。



























そと涙を催さぬ

子を懐く老渡女が衣の秋の雨

袖ののろもあは波満々と弄せて空はなほく曇るらん台榭の方秋歌

よま

砲台の竹のたれたれの秋の首句

林あふみの歸帆のうらむ夕日一のみ

えより下等の車きまれば老婦若人は衣たさる花甚きまよしのれの

ま娘車一はあれど一目三葉の美女は人もたさる

もよくこれのら大磯までまぢるけの思へはあきけよく

汽車車東のお陰其えは枯のやま

らぬとも考へ去のう行くよ 汽車はいん志の大森林をぬぐぬ

老雑川崎の流まらる西の方を見れば夕陽西出子らん

秋陸園をみて色に見はひ其美三葉も大あし

秋の夕白山の端のさくればふしあり

緋の色をたよりさきさるる 秋の山

ふとれば秋の先き程より

ほつれて所々糸の下りも

行々もよのふ 何となく三の毒なる由のせりて

ののよんらういしての

積下石せの生路も 秋風あやなく

行くも入ては、いんか 物のと衣れを感ぜざらむ

鶴のまやがしる ぞと 神をのり 日け日すくれのりん

入江の



水寒むけより、と云はば江を流ちて、鎮西の布られたる道  
は筑紫られたり。これぞ我軍士を預鳥をえらん為めり  
られし事なりといふ。我國民の愛を極むる堅く政府の計畫又故  
ふる敏活するを望まはるるを望み、此の事を以て先にも既に我  
國の勝利を下す可きと思ひなりぬ。

長江橋の道や龍の形

鎮西の秋の江を流ちぬ。

秋の月西空のひかりを〜雲に入る。

伏し稲をさむ末と照す三日の月

秋の月

大船も浪ぞ、津波を漸く人きく、  
漸く息を心

藤澤の月

くも得〜、  
く、  
く、

松林の煙

松林の煙

秋の月西空のひかりを〜雲に入る。

鎮西の月

鎮西の月

馬入の川、  
松林の煙、  
鎮西の月







秋の世 小次女や花けり二子山

行く秋の駒ヶ嶽も追付きぬ

歸家後は別れもすまじきもふくし順路を相手を將基を乗せし午  
後三時過出でて停車場近傍まで山岩崎氏の別邸の山登  
る風光別れ候ききありし野は黄ばり丘は濛濛せ行く  
秋の暮春の哀れ身のせまるん地志を花水の池馬に者林眼  
下あり前回は渾舟数隻連ぶたたり

秋の海や舟の木のまの清の上

波先蕩孤帆小秋の日はあこの志

海はれて烟たふびく飛来者空立

天の川 眞鶴ヶ崎三浦

富士が山峰今日は清く見えて西鏡に似たる雲頂ききたふびけ

る次女面白志とも面白あや

天の遊ぶ天女のさよや玉葉共谷

秋の雨の富士も秋の雨の文はす

龍が富士を越るや秋の雨の

時治 歸舟す 再び入流梅別れもすまじきもふくして暮るぬ  
四日々 晴日雨

朝来風雨甚也

秋の秋雨をききし 龍宮の

風涛の松の空かせ見えて時雨のふ

夜もすがら海の音秋を惜みけり

ハ竹以朝飯 空重と盤を對す 於二時過喫飯 一時過群  
鶴梅を出で停車場の来る 待のことも 数時合 漸くあまて  
アコトホム子松の 我侍の何れのの事君良人と並びてあり年

出軍の征士を送る  
車を見るもくはま  
下河軍をまきり







さうぬ。只手をやすめりあはばなへして徒然堪へるたのらむいと  
男の世りして、鉛筆を手にしり放たむ。田心い出らるるまふふ  
紙に記るる止めぬ

野辺は黄く山崩せ行く秋のくれ  
紅葉今一時雨ほあけ  
戸塚の近き道傍の石碑一基雨のまじりて空をまは  
るぬ

草のれて野中の孤境あるはらう  
秋雨や枝まよふうの無縁境  
春の雨も秋の雨も九迄異はるはあなを秋の衰れの深  
は秋の景色の小み宿れるまらむと男のて

雨は同か林あきしは只秋の暮  
程ヶ谷の流すあきく小丘の切割あり

新産の雛菊のほる秋の雨

今日よりや緑あせふ小松原

すさま志や野の跡の雑木山

志寺や河の山原花散りぬるぬ

程ヶ谷もろく枝渡りぬるぬ神奈川の江小のり

舟あり

笠を漏る秋雨まむしりのり舟

鶴がたはさばの野の面のまはりのれぬるり

そとまふのいふ倒れて跡は枯れぬ

野山風鳴子は切れて鳥立ちぬ

旅僧の宿の三軒はすし野人のいふ  
森林中を伐木二三白く見えぬ  
寝覚えぬ敗れ何のめらるる雨の音







此は友野詩印防をまのまの生る島嶼のさかひたるの不在より即ち芳  
不の土まの南カをて誠の公國を出で方盛に危れたる其を嘆し曰  
時以歸をせり

六日火曜日晴

筑地へ行くと何の如き生家等は西鶴集不續留を著す  
いぬ土橋に引並み雁といふ類文を書きし始り  
前隣家の妻女がめい子疾者の当りたる手紙を授けぬ

七日金曜日晴

桑地り割の如き午後辰辰川を女子雜法へ投書  
せんが為め清書を夜へおけて假名を朱を付ぬ

八日木曜日晴

後光りくるる割の如き午後辰辰川まで知恵子の為め  
骨牌戯を著すおよは迄の活る不可なり由を聞ぬ

文壇より舟共二二両号を不ふ可き由を詢せり 夜は不戸川に三本  
る七軒所を移轉せりといふ 雑談数時を著す 透谷集  
を適詩す 哀れなる節いと少きことず 巻を閉じて眠  
らんとすれば残燭の青いと寂びて枕を御さるるを  
押せば寒月樹間をのめりて凄光幽二の影を見直る  
廿夜す

廿夜月やられ行く秋の小井原

のれて行く奥の音はのり夜の秋

と氣は澄み分て 枕の虫を聞く夜

九日金曜日晴

午前中お願紙を著す 行秋のあもひとの心を物志の  
たる晩は秋有詠の集りぬ 山嶺の事あるとを中心  
とをて種々雑法を著す 上の白紙道に種あるは



ほろぬ。歸途。月眺る。秋霧を思ふ。雁声。地面  
を傳へ。空の音。さうと。呼ぶ。秋。け。静。境。  
は。の。る。あ。ん。ん。を。い。の。あ。か。

秋の夜や雁の月日の空を呼ぶ。  
秋霧や月眺る雁の去り。  
目首の霧をさるけり秋の雁。  
緋月や秋霧の飛ぶ雁の去り。  
存もすべし也をめぐり秋の雁。  
秋霧を雁飛ひぬり月を思ふ。  
羽の霧をやがり。秋の霧の面。

句をさるべしと云ふも  
十日土曜の晴  
午のあかきく行く秋のあらしの音のこもる。

旅途の静けさ  
止まる山路

我輩を州の火車  
津を渡る旅を  
困りし静けさ

晝頃秋月来り共ニ明治美術會の油畫を觀る  
これぞと思ふものはヨクニ思ふ。オランダ子ジエ民との牧羊の  
図の模寫はさう目のつきぬ。裸体画は皆生炊。繪  
去郎模寫の用意正。書上り志志のまん女神は年少  
まゝ人間以外のまわの物は画けざらぬ。まゝに藤村  
をけし。后臥中あり。五竹治。家を歸れば。先守の程  
城雄氏訪ひ来るとこの。家をては行く秋の思ひを書き  
十日土曜の晴  
朝は九時の山登り。午後は行秋の懐を清書目す。夜  
ふり秋骨をけし。層層紙を所記す。酒井氏来りぬ水  
雷車射籠。と。戦車談を語りぬ。九時。別歸家す  
十日土曜の晴  
午後は行秋の懐を書き終へれば。雁のうれひの訂



正清書の三事志 晩方まを子金く四夏人の子まを  
終りぬ 秋宵を待た 談話屢々 山嶺の伴なるがぬ。

行く秋や 旅人の上を思はさるる  
うき人の おさめやいりの雨の秋。

早川の 水も 秋行 旅人の雨。

山里や 落葉 かくるる 秋の風。

山里の 女も かくるる 落葉のま。

行く秋や 山家の 女指を 折る。

谷の 塚も 旅人の 子今りの 秋。

十三日月曜日晴

朝大時名 彰南を 禮む 第三軍 止陸進軍の 大足 野の 詳を 報

せられぬ。 今所 大連 渡の 占領は 事實なり 若て 松原も 或は 陥

北せまらぬ 三時 過より 西鶴の 代方の 一部分 乃か 武

道徳集の第一巻を讀む

猫の子や かくるる 秋のくれ。

猫の子の 夜寒を みるる 月落をぬ。

夕の 入や、 院垣の 草も ありあけり。

秋の 夕桐の 葉も 黄く ありあける。

梧桐 黄落 志 芭蕉も 今は 破れけり。

芭蕉 葉も 破れて 暮るる 夕のふ。

菊散る 人 蝶の 舞は 行く。

秋の 夕 蝶は 花を 眠る ぬ。

粉を 折れて 蝶は 舞は 行く。

羽を 折れて 蝶は 舞は 行く。

安を 打て 澤瑠璃を 流る 月より ぬ。 雨の 音 秋

就眠 前 傳 集 記 の 第二、 第三の 巻を 讀みぬ



拾四日水曜日晴

朝の時は豊川を以て、借入金のを頼む午前は新聞紙を讀む秘帳日は抵抗なく来てと領せられたりとの上海電報来りぬといふ山路將軍好敵手ふよと唯ふなるをうむ。午後二時頃「作者の不在と筆論」といふ書の内、「ジニアスは想像を撃つるをうむ」といふ「女作者」エリザ、ラクス「作者の病氣」ラレター、ヘントレー「筆を撃つる」其の内女作者巨魁「我感情」を引く其作リアニアの梗概のよりや説を作らんことを思ふ。作者の病氣亦甚るむべしものなり。西鶴の武道傳未記を終るまで請ふやぬ、涙をたると想の泉誰のは吾人でぬ境の達者得可き、と云ふは一鬼才なり、吉川大發より歸す。

林あすの木の記は未今日の日、秋、鐘遠く其落葉の秋はくれ行く。

誰の園ぞ菊一二輪、草枯れぬ。

野はくれて雜菊月あけけり。  
辻堂の旅僧、秋を惜みけり。  
月今宵野寺の屋根をいでけり。  
夕ぐれ、野菊のふ。  
弘根、天代ものけふ、野菊のふ。  
千代、代盛、久あや野川の菊。  
暮るる、漁村の秋の夕のふ。  
娘一人磯辺の立てて、秋は行く。  
かた一人、沖あちり、磯家の秋。  
早川、釣する人や、秋の首首。  
行く秋や、釣する海人の、袖まむ志。  
枯れ松の、鴉とまりぬ、今の秋。







菊園より衣を着る女の子

三時迄歸宅、お圓城を讀む子旅順はまだ陥らず多分今  
明日攻撃の筈であるこの獨眼龍將軍の意気果て如何

銃銃の月の音あり今日の秋  
月出でく望月大畑く赤穂立ち

以朝砲烟城を包みけり  
故里小妻女秋を懐き今日の月

雁鳴りて將軍秋を懐き今日の月  
人の接ねて將軍星を仰ぎけり

旅魂今宵北京の空をこけめぐる  
大刀取りを仰ぐ人あり今日の月

夜よりゲウケスガクリウス、カールを懐き旅順、カールが「永冬  
を告ぐ」言ふも難解なり

於百令曜の晴

朝松村迄元朝の遺蹟あり、新鳳城を信る、土師川永木  
まゝも時流の接人ある、新鳳城ありむじ三時迄のなぶ西  
鶴の永代蔵をよみまて懐きぬ。

林野の月下の騎馬の武者一人  
鐘の音圓を城へ響きて野は暮れぬ

門附の松次や今日の月  
月のこゝろ松の糸はあはれあり

昔の月流れゆく夜寒たふふ  
眠れぬ雁・むれをり月夜の池

手おられてあゝらむ都の隣の子  
行たれぬ子、はらや隣の子  
行く秋や山々水の痕七月の立ち











西教書を讀む十時迄再び教書へ入りし不忠議の教書を拜  
聴せり。午後上野信太郎君、日本新聞を讀む。其後  
西鶴の永代藏を讀み終りぬ。今日は、我々の命は  
りといふ。

秋夕、桐葉落ちて菊枯れぬ。  
初冬や涙もさむし人の跡。

落葉のふた夕風寒く今日的首首。  
顔知らぬ兄の位牌、冬は来ぬ。  
買物もあつて、秋月と行き逢ふ。通つて散赤す、仙人山を出て都  
を去るの思せり。

拾九日母晴、朝寒晴

此日朝は九時迄雪もあつた。午後は赤木と共の上田氏の寓を訪ふ  
に、坐すありければ一筆お子の許を訪ふ時、談話の愉、眉山が廣

を叩く折、筆く在宅せり。種々の雜誌をよみぬ。此人は頗る  
文學界を志すも、近い者を持つて、故より、やうあり。酒食を  
御座せらる。晩方詩を讀んで、上田氏を訪ひ、西洋雑誌を借り、家  
を是れの中のアサシンド、ポーワレイトと、いふ、お説を讀む。

初冬や紅葉の枯れを、水が冷たふ。  
冬枯や骨さむげあり、さるす入り。

廿日火曜日、日曇雨

此日は午前中は曇り、午後新聞を借り、午後三時前より西教書の辭書  
を御座りぬ。眼を痛む、元氣を失ふ、不忠を、ければ、歸る、  
壽の少女の、ゆめ、骨牌の、相手を、まき、歸る、又西教書の辭  
書を、志す、總計、拾百、を、讀み、近松、門を、讀み、  
以、法、讀、む、程、さ、り。

野は、萬葉、傳は、せの、昔、が、これ、日は、か、ぬ



紅葉の江戸朝はうれ人とす。  
越へ来て身へのりけり紅葉山。

廿一日水曜日晴

朝より家を出て新田の近松園を讀む。思宜換は室内  
の片付をす。三時過ぎ下田氏来り。夜よりやうやく頃志  
路をければ所を訪る藤村あり。種々雑談をす。始時  
過ぎ家出で歸る。終夜眠る。

廿二日本曜日晴

一時過ぎ二時三時の頃と園をくやうやく一睡すればははは  
ありあそび籠む起す。築地のカリやぬ。九時過ぎ歸る。  
始時過ぎ所を訪る藤村あり。種々雑談をす。始時  
過ぎ家出で歸る。終夜眠る。初身は東  
むを川大連の戦報はまれども未だ極川の功身は東

りず。晩方みをつくしの行教を香す。存りかお  
梅子の世の道理を論す。お父珍らましく三田まで  
まらぬ。入浴はのいづと。あそびあそび行けば自ら浴室  
かかろ水を湯桶の改りみして我為あふ湯か減を我の  
足れんとす。えの毒あれば之を許さぬ。相更らば便  
去く親切やまは此人の更はまらぬの。

皎々たる月曉をさむけあり。

釋ちて湯を汲み足らぬ隣の子。  
初冬中湯般お少女水を汲む。  
我為あふ湯をうめけり隣の子。

廿三日金曜日晴

午前より相より西教史の蘇我も午後より。晩食は秋  
不富を訪る星野。佐藤村秋あり。菊日氏来り。三民不



り七後猶法信す、於時り過許きて歸る

七四日土曜日

主明は新國を見る、午後は西教史の翻記を考ぬ。夜よりとも  
同志ありし、

九五日月曜日

張順隋其志は去る此二日の起りたるもの。新國を讀みて後は西  
教史の翻記を考す。餘程抱腹絶倒する所あり。此かある  
らざるを。夜へおきて三於更はのりな記す。

九六日月曜日晴

朝は築地をりく外奴我勝戦を疑ひて不記の事を知り見よ  
十年貳拾年の後射美瑠眼の奴を考し榮嶺寺の事を知り  
らめむ。歸家後は翻記を考す。夜より元日の事あり  
共考す。街路を考す。此日は五時頃寫りて書を撮りしなり

きぬ。

九七日火曜日晴

朝は例の如く築地を行きぬ。歸家後は翻記を考すぬ  
凡そ二於更はのりあるなり。

九八日水曜日晴

朝は築地を行きぬ。午後は翻記を行志、島崎の日章有力  
訪ひ来れり。三時餘談話を去れり。語は長し。翻記  
を考すぬ。此日お父は病氣全愈ありて歸り来れり。御堂  
前より来りて、**我**を合むて、於時談話の後去れり。

Shunpei, all heaven! We have her again!

九九日本曜日晴

此日朝は築地、午後新國を讀みて、夜は和音を考す。其  
の如く、凡善書本にのりて久考す。二階へ登り

**我**















朝小泉信吉氏の計を耳より存めの士の文竹殿なる哀  
悼の極あり、午後は別ふ事事もよく日を送りぬ。  
九日 晴日 曇云

此日は後捷會の日より朝より花火のなる人の嘆きおど  
故より騒然曲書のし書信の馳送なりぬ。志のもあ文  
の給仕もて、近來の俵伴持筆す可き所ありぬ。  
の用は計は余のめゆる茶菓菓子も持し来り、今日も又  
此の努力も惜まざる大の射す可也。午後は上階書部  
と信部氏来りぬ。種々雑談の後二人去りぬ。夜は  
不、前もたぬ。地の端は球燈戸々子輝き、持敷  
よは人免端者。此は又人の山を築き、秋分の室  
のは、七村平谷氏の事君と禿木あり、前。弟と信  
あり、禿木のめゆる三階へりき上げられて定

信

遠の度けるも見たり、上田民討ひ来りぬ。清氏去り  
て後、於時、命は歸途よりぬ、人散去、池畔の雲  
燈のと林をけり。翌日は歸途より平坂の接  
志ぬ里、是れ等、此は一事、頼みの失れたる由あり。

十日 月曜日 雨 甚し

此日は朝、時、宿、起、於、境、一、手、紙、を、出、し、ぬ。午、後、は  
新、雨、を、帯、ひ、上、田、民、来、り、し、こ、り、一、手、紙、を、出、し、ぬ。夜、は  
け、て、ゲ、イ、ウ、ケ、ス、の、チ、ヤ、イ、ム、ス、を、讀、む。座、子、暗、涙、を  
催、さ、る、所、か、も、ま、と、も、ぞ、就、中、ト、ビ、ー、ベ、ツ、ク、の、ウ、イ、ン  
る、一、手、紙、を、讀、む。何、れ、や、ら、嬉、者、や、校  
あ、然、も、い、極、な、一、種、不、思、議、の、感、情、を、起、し、ぬ。何、と  
も、く、此、の、日、は、悲、し、き、事、の、ゆ、え、に、出、て、ら、れ、て、志、は  
ま、は、涙、を、お、ぼ、ろ、と、り、た、ま、も、我、を、の、突、ち、お、志、



拾一日火曜日雨晴れ風吹く

評

朝は早く起し手を出てぬ都の志を西に出あて一善夫氏の  
埋れ木を讀みぬ。晩方元教寄屋所なる渡来氏書  
ふ不きありハの堀を散かゝり又再び行けは在宅を  
少時校訂す。仕事は来年月よりば批論(五子)の  
方を頼みぬしとの事ありき。氏は越ふる北なる志す  
容観の人あれども雅接はあまほあり中々物貫れ  
たる人あり。歸筆自記より行すハ登朝(五子)の  
義大(夫)を頼み聴く。初日は京子梅玉の酒屋次  
は宮玉隅吉の御社櫻(ま)の善す(出)来あり(往)々  
の火取記は樂に屋まで用し。要る調子あり。容  
態梅の管(本)し(よ)志も感服せむ(切)りは山登(執)の美  
根(共)の(補)補(也)臣(藏)八(目)詩(り)善(す)丹(出)来(と)も思

はさうすい(樂)屋(は)は(を)ら(志)不(書)日(生)及(び)病(人)伴  
の(田)の(三)三(人)入(り)ひ(子)は(ら)し(ぬ)。(の)ら(志)不(書)日(生)及(び)病(人)伴  
種(の)風(儀)あ(ら)た(ら)し(ぬ)。(何)時(の)以(れ)ま(す)も(て)ん(り)す(る)  
日(あ)る(を)ら(志)不(書)日(生)及(び)病(人)伴(の)中(の)一(五)せ(り)。

拾二日水曜日天気よし

朝は涼かた(カ)カ(カ)志(の)別(の)要(事)も(あ)ま(た)時(前)歸(筆)  
初(ま)り(て)朝(報)社(徑)軍(の)口(の)あり(を)あ(ら)と(い)ひ(ぬ)出  
く(康)村(あり)し(一)葉(子)折(を)ホ(む)。(午)後(志)時(半)の  
段(車)まで(松)垣(あり)き(や)泉(を)吊(詩)を(ホ)べ(ぬ)世(後)  
新(報)會(社)を(松)永(氏)が(志)す(は)た(は)法(清)の(由)あり  
三(時)過(の)段(車)を(歸)る(相)根(近)く(の)山(々)は(白)雪  
を(冠)せ(り)

夕陽田の面をそめて月田(二)のそり



嬌

昔用修とあつて日の色さし志路江のくれ  
夜の入りたれを討ひ種々雑談志 拾一時前歸家  
拾三日未曜日晴 ぬる暖気  
皆拾一時にお父我室前を導りて少時談話志  
去りぬ嬌女優婉我大の悦抱ちりき午後時  
過ぎありみをもくしこの夏敷を精査志くる子  
僅々九五幸あり 即ち夜にたり市利の蝶じと蝶  
志て對朝夏の子蝶を喰せんとせり  
拾四日全曜日晴  
朝は曇地へらく昇途秋骨を逢ふ午後三時過と子来る  
相共のせとて一葉子を討ふ子は秋の前とは違ひて秋  
有木天の空を渡りたる色艶も美はましく猶子も志ほ快  
活あり小宮山某氏の送洛詩並に不承庵主人の話を聞けり

四時頃去りて上直を討ひ少時談話の後舞宅又出て  
秋骨の空を討ひたる島崎あり 秋座志て放談するあり  
秋刻午は拾時迄 歸りませり  
拾五日土曜日晴  
此月半前は眠く起りて毛圓を請ひて午後を暮とてお  
お父二周ある態なほゆりて飽きたり お父のめある  
右田某氏への手紙を記す 夜にたりお父の探訪志を於  
百の事 拾時迄寒を驅る暇も身所建論を日く二人  
寝るのには指さのさあちりよし之れあるお  
拾六日土曜日晴  
此日は午前迄は教者を出たりてとてヤ一氏の役物志  
聞く事々担ぐ所の鼻氣志を志を心地せり午後  
二時社志を置くる藤村志を討ふ不承庵の中へ去りて某原



是を南に於て北に於て見ゆべし柳を以て人の身と云ふを以て  
 十重層の柳を以て北に於て見ゆべし柳を以て人の身と云ふを以て  
 不坐より著るまゝ屋を立定むるは在り北に別葉成りとい  
 ふまゝの柳の書あり嗚呼人は生はまゝを死すなりけり恨  
 を君人下と海に流れてより今日は征討の軍起りぬ  
 此間別る身もたつる原国もさし車もまゝにたつる人地す  
 るも不思の事あり。著るまゝは故郷の美味ありし中一又  
 三言のまゝに馬車はまゝあり。まゝに歸着せしは千倍の時  
 間ありし。まゝにまゝは太田氏苑の事なりを事なりし。四十一  
 拾の月曜の朝は晴在りぬ。

志を得る所僅のまゝ。月曜の情なり。











